

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 9 月 8 日現在

機関番号：10101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2019

課題番号：15K16710

研究課題名（和文）19世紀ロシア文学における言語と身振りの関係についての総合的研究

研究課題名（英文）A Comprehensive Study on the Relationship between Language and Gesture in Nineteenth-Century Russian Literature

研究代表者

安達 大輔 (ADACHI, Daisuke)

北海道大学・スラブ・ユーラシア研究センター・准教授

研究者番号：70751121

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：19世紀ロシアの文学を言葉と身体の関係から再考することを目的として、言語がもつ身振り性という一貫したテーマに多様な角度から取り組んだ。分析にあたってはロシア文学・言語思想のみを扱うのではなく、同時代のさまざまなメディアにおける身振り表現や、18世紀の言語起源論以降ソシュール・パースに至るまでの欧米の言語思想における言語と身振りの関係についての議論を視野に入れた。以上によって、言語を身体的な実践の場と見るという近年の文学・文化研究で注目されているアプローチに対して学術的貢献を行うとともに、身体を重視する言語文化をロシア独自のものとするロシア特殊論をより相対的な視点から見直した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

19世紀ロシアの言語思想史に関する優れた先行研究を踏まえ、本研究は言語の身振り性（対象指示機能）に注目することで、19世紀ロシアの言語文化を特殊ロシア的な文脈から解放し、言語と身体の間をめぐるさまざまな言説や実践に接続して比較対照する可能性を提示した。本研究の成果は論文（英語1・ロシア語1含む）・報告（英語5・ロシア語7含む）、日本語共著図書（2）、国際シンポジウム開催（4）と国内外で幅広く発信した。言語と身体の近代的関係の見直しという現代社会の重要な問題に対して、文学・文化研究の最新の動向を踏まえながら国際的なレベルで貢献することができた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of my research is to rethink nineteenth-century Russian literature within the context of language and body. I completed a comprehensive study on the relationship between language and gesture in nineteenth-century Russian Literature. Besides the texts of Russian literature and Russian thought on language, I also analyzed the gestures represented in contemporary media and in the discussion about the relationship between language and gesture in European linguistics that extends from the discourse on the origin of language in the eighteenth-century to Saussure and Peirce. I provided a perspective to rethink the discourse on the national originality of Russian thought, demonstrating a tendency to make a close connection between language and body is not peculiar to it. This research contributed to the recent studies in the field of literature and culture that are increasingly focusing on language as body practice.

研究分野：ロシア言語文化論

キーワード：身振り メディア 身体 言語 文学 ロシア 19世紀 表象

## 1. 研究開始当初の背景

本研究に関連する国内・国外の研究動向及び位置づけは次のように整理できる。

1. 構造主義・ポスト構造主義は、記号のネットワークとしてのテキストという見方を提示することで、20 世紀後半以降の国内外の文学・文化研究で重要な役割を果たしてきた。こうした方法論の土台をなすのがソシュール言語学を発展させた記号論である。

これに対して 90 年代ごろからアメリカを中心に、記号論によって析出される言語や文化の構造を、行為者によって実践される動的なプロセスとして理解し直す研究傾向が生まれてくる。規範の遂行そのものがその攪乱の可能性を宿すという事態を表現するためにジュディス・パトラーが用いた「パフォーマンス・ヴィティ」という用語は、ジェンダー研究の文脈を超えた影響力を持ち続けている。一方で映画や美術などの視覚文化やメディア論を中心に、「アフェクト(情動)」をキーワードとする研究も活発になってきている。そこでは情報の伝達と理解が別個のものとして切り離されることなく、身体間の模倣や共鳴・共振など、言葉によってはっきりと分節することのできない諸力の作用と関係性の生産の場としてとらえ直される。

2. 文学や言語学・思想史の分野においても、言語をスタティックな構造ではなく、身体的な実践の場と見る見方が盛んになってきている。先駆的な試みとしては、18 世紀に盛んであった言語起源論以降の言語と身振りをめぐる議論を扱った G.A. Wells, *The Origin of Language: Aspects of the Discussion from Condillac to Wundt* (1987) があり、日本でも中村靖子が『フロイトという症例』(2011 年)の中でこの問題を論じている。ほかにもロマン主義文学における近代的自我の誕生とその身体観やダンス論を結びつけた Lucia Ruprecht, *Dances of the Self in Heinrich von Kleist, E.T.A. Hoffman and Heinrich Heine* (2006) や、モデルネの言語と舞踊の関係性を論じた山口庸子『踊る身体の詩学』(2006 年)などがあげられる。

3. このように近年の文学・文化研究では 20 世紀の記号論的な言語観を身体性の観点から読み直そうとする動きが国内外で活発になっている。言語と身体の結びつきを重視する点では共通しているロシアの言語文化が比較対照の機会を提供することは、このような学術状況に対して非常に大きな貢献となる。

近代ロシアの言語文化には、言葉(ロゴス)は身体において受肉しなければならないとする思想があった。アジアとヨーロッパのはざままでロシアには独自のナショナル・アイデンティティが欠けているとする言説が 19 世紀以降強まってゆくなかで、受肉を重視する言語観は、ロシアの無個性を無限に発展する可能性を秘めた可塑的な身体として反転させ、肯定的にとらえ直す帝国主義的な言説と結びついてゆく。

以上のような見解は主にソ連崩壊後のポストモダニズムの知的潮流をリードしたロシアの思想家・研究者によって提示されてきたが、アメリカでも Thomas Seifrid, *The Word Made Self: Russian Writings on Language, 1860-1930* (2005) のような有力な研究によって共有されている。また日本でも貝澤哉が『引き裂かれた祝祭』(2008 年)などの一連の研究の中で同様の指摘を行っている。

このような見方の問題点は、受肉重視の思想にロシアの言語文化の独自性を見るあまり、それがソシュール系の近代的記号論とは完全に異質なものだとする主張と結びつく傾向があることである。

20 世紀ロシア・ソ連におけるソシュール的な記号論の受容は V.V.イワーノフらによって十分に研究され、日本では桑野隆の『ソ連言語理論小史』が評価を確立している。しかし、ロシア・フォルマリズムやエイゼンシュテインら 20 世紀の記号論のパイオニアたちが同時にロマン主義の言語観から大きな影響を受けていたにもかかわらず、このあいだの歴史的・理論的な関係については、国内外でまだ明らかになっていない。

本研究はロマン主義以降の 19 世紀ロシアの言語文化を特殊ロシア的なものとして孤立させる言説を繰り返すのではなく、相対化することを目的とする。そのために 18 世紀からロマン主義・実証主義を経てソシュールに至るまでのヨーロッパの言語思想を踏まえた比較研究を行う。2013 年にロシア文化研究者のボリス・ガスパーロフが公刊した *Beyond Pure Reason: Ferdinand de Saussure's Philosophy of Language and Its Early Romantic Antecedents* は、ソシュールの記号論が生成する歴史的過程を F・シュレーゲルらドイツ・ロマン主義との類縁関係から論じており、本研究の問題設定にあたって大きな刺激を受けた。

研究代表者は研究開始時まで、言説分析・メディア論などポスト構造主義に基づく手法によって 18 世紀末から 19 世紀前半における近代ロシア語・ロシア文学の成立についての語りを読み直す研究に従事してきた。博士論文を中心とする研究では、現在まで読み手に様々な未解決の問題を投げかけている作家ゴーゴリの文体の生産性の中心に、ロシア・ロマン主義文学における記号の体制の変容があることを示した。そして、物を直ちに指示する記号の連鎖によってメタ言語が確保された状態(フーコーのいう「タブロー(表)」)から、そこにあるはずの物がすでに失われており、それを指示する記号の身振りが空振りに終わってしまう言語体制への変化がロシア・ロマン主義文学を特徴づけていることを明らかにした。さらにそこから、この空振りする言葉の身振りを国民社会の中に回収することがそれ以降の文学の課題として残されたというパー

スペクティブが得られた。本研究はこの着眼点を発展させたものである。

## 2. 研究の目的

本研究は、19世紀ロシアの文学を言葉と身体の関係から再考することを目的として、言語がもつ身振り性という一貫したテーマに多様な角度から取り組む総合的な研究である。分析にあたってはロシア文学・言語思想のみを扱うのではなく、同時代のさまざまなメディアにおける身振り表現や、18世紀の言語起源論以降ソシュール・パースに至るまでの欧米の言語思想における言語と身振りの関係についての議論を視野に入れる。以上によって近年の文学・文化研究で注目されている、言語を身体的な実践の場と見るアプローチに対して学術的貢献を行うとともに、身体を重視する言語文化をロシア独自のものとするロシア特殊論をより相対的な視点から見直す。

ロシア・ロマン主義文学とともに、記号にとっての問題は、より完全な対象を指示することから、表現しえぬ何かを指示する身振りそのものに注意を向けることへと変化した。本研究の期間内には、記号の対象指示機能が持つこの身振り性が近代ロシアの言語文化においてどのように受容されたかを以下の点から明らかにする。

言語と身振りの関係について、1830-40年代のロマン主義文学と50年代以降のリアリズム文学との比較を行う。

ロマン主義の影響を受けて1850年代から60年代に形成されたスラヴ派の言語論とその60年代以降の受容における、対象指示についての見解をまとめる。

バレエ・ダンス・演劇や写真・映画、さらに礼儀作法書など同時代のさまざまなメディアの身振り表現を参照する。

言語と身振りの関係について論じたロシア以外の言語論を参照して、より一般的な枠組みの中で、19世紀ロシアの言語文化の特殊性と一般性を考察する。具体的には、18世紀のさまざまな言語起源論、F・シュレーゲルからフンボルトまでのロマン主義的言語論、ソシュールにおける対象指示機能の問題（記号の恣意性）、パースのアイコン・インデックス・シンボルの分類などである。

## 3. 研究の方法

(1) 具体的な研究は以下の計画によって進めた。

平成27年度：19世紀ロシア文学における言語と身振りの関係の類型化

平成28年度：19世紀ロシアの言語思想における対象指示についての見解のまとめ

平成29年度：同時代のさまざまなメディアに見られる身振りとの比較

平成30年度：19世紀ロシア文学における言語と身振りの関係についての総合的な理論化

平成31年度(期間延長)：補助事業の目的をより精緻に達成するための研究の実施(学会参加、論文投稿)

(2) 以上の研究計画を遂行するために、以下のような工夫を行った。

A. ロシアを中心とする国外図書館での資料調査

B. 国内外のロシア文学・文化研究の専門家 隣接諸領域の研究者との学術交流

C. 国際的な研究会への参加および組織

## 4. 研究成果

### ・研究の主な成果

初年度に19世紀ロシアの文学作品における身振りを分析し、二年目はロマン主義以降の言語思想における身振りを扱った。三年目は演劇とオペラの分野を中心に同時代のメディアにおける身振り表現を参照して、19世紀ロシア文学・言語思想における言語の身振り性との比較を行った。四年目はそれまでの研究を包括的に見直し整理するとともに積み残された課題の解決に努めた。特に19世紀後半のリアリズムから象徴主義にかけての文学作品の分析、そして同時代のメディア(演劇・絵画)における身振り表現との比較の分野で最も大きな成果をあげることができた。最終年度はウクライナ・ポルタワで開催された国際会議「ゴーゴリ研究会」に参加、報告を行うとともに報告を基にした論文を発表し、本研究課題の成果をより国際的に発信した。

資料の面では、国内(北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター等)及び国外(モスクワ・サンクトペテルブルクの国立図書館等)での調査を行って質の高さを確保した。研究成果は国内外の研究会への参加および学術誌への投稿を通じて、国際的な水準でのチェックを受けた。ICCEES世界大会(2015年度)をはじめロシア・ウクライナ・中国・台湾・韓国で学会参加を重ね、2018年度には国際シンポジウムを札幌と東京で主催、中国(上海)で共催した。これによってロシア語圏だけではなく、アメリカ・カナダ・イギリス等の英語圏、中国・台湾・韓国等

のアジアの研究者との研究協力体制をつくることができた。

より啓蒙的な活動として、スラブ・ユーラシア研究センターでの公開講演会（2018年度）や公開講座（2019年度）で講演を行うなど地域社会に研究成果をわかりやすく伝えた。

以上のように、本研究では19世紀ロシアの文学を言葉と身体の関係から再考することを目的として、言語がもつ身振り性という一貫したテーマに多様な角度から取り組んだ。分析にあたってはロシア文学・言語思想のみを扱うのではなく、同時代のさまざまなメディアにおける身振り表現や、18世紀の言語起源論以降ソシュール・パースに至るまでの欧米の言語思想における言語と身振りの関係についての議論を視野に入れた。以上によって近年の文学・文化研究で注目されている、言語を身体的な実践の場と見るアプローチに対して学術的貢献を行うとともに、身体を重視する言語文化をロシア独自のものとするロシア特殊論をより相対的な視点から見直すことができた。

#### ・得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

19世紀ロシアの言語思想史には、ヴィノグラードフやボリス・ガスパーロフらによる優れた研究が蓄積されてきた。このような先行研究を踏まえた上で、本研究は言語の身振り性（対象指示機能）に注目することで、19世紀ロシアの言語文化を特殊ロシア的な文脈から解放し、言語と身体の間をめぐるさまざまな言説や実践へと接続して比較対照する可能性を提示した。言語の身体性に目を向ける文学・文化研究の最新の動向を踏まえた問題意識と分析手法の現代的性、理論的な視野の広さと精度、学際性が本研究の学術的な特色である。

研究成果は論文（英語1・ロシア語1含む）・報告（英語5・ロシア語7含む）、日本語共著図書（2）、国際シンポジウム開催（3）、国際パネル組織（4）と国内外で幅広く発信した。本研究はロシア言語文化研究において国内外で強力なインパクトを与えるとともに、言語と身体の間近代的関係の見直しという現代社会の重要な問題に対する有益な貢献となった。

#### ・今後の展望

言語と身体の間という問題は現代社会においてますますその重要性を増している。本研究課題では19世紀ロシア文学の作品を分析の中心としたが、今後は対象とする時代の範囲を18世紀以前や20世紀から現在へと拡大し、通時的な視点からこの問題の現代との接点をさらに明確にする必要がある。ロマン主義以降の言語思想についてはK・アクサーコフ、N・ネクラソフ、プスラーエフからポテプニャまで基本的な文献を収集することができたが、具体的な分析を十分に掘り下げることができたとはいえない。この点も今後研究をさらに深化させてゆく。

また今回バレエ・ダンス・演劇や写真・映画、さらに礼儀作法書などさまざまなメディアとの関わりを視野に入れて総合的な視点からこの問題に取り組んだが、以上の研究分野にはそれぞれの研究の蓄積があり、より専門的な見解を取り入れることが望ましい。そのためには各分野の専門家との共同研究が必要であり、この過程で、チャイコフスキーのオペラ『スペードの女王』やゴッリ作品の映画化といった本研究課題の枠内で行った報告内容をブラッシュアップし、論文として発表しながら共同研究を進めて行く。

言語と身体の問題について現代的な視点からの考察を深めるのであれば、ロシアだけではなく日本をはじめとする他の国・地域との比較研究が必要になる。それを実現するべく、専門とする国や地域の壁を越えた集団的な研究体制を構築するとともに、本研究で広げた国際的なネットワークをさらに開いて行く。

以上のように、時代、ジャンル、専門、国・地域を超えた集団的な研究グループを組織して現代的な視点から言語と身体の問題に取り組む計画を今後の展望として持っている。研究代表者は2019年度から本課題研究の継続・発展である基盤研究(B)「ロシア・旧ソ連文化におけるメロドラマの想像力の総合的研究」を開始しており、すでに今後の研究体制づくりに努めている。



1. 著者名 安達 大輔	4. 巻 48
2. 論文標題 書評「イーゴリ・レイフ著（広瀬信雄訳）『天才心理学者ヴィゴツキーの思想と運命』」	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 ロシア語ロシア文学研究	6. 最初と最後の頁 223～229
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32278/yaar.48.0_223	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Daisuke Adachi	4. 巻 56(1)
2. 論文標題 Gesture of Trace: Rethinking "The Photographic" in Gogol's Writing	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 Hitotsubashi Journal of Arts and Sciences	6. 最初と最後の頁 55～68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15057/27659	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計15件（うち招待講演 7件／うち国際学会 12件）

1. 発表者名 Daisuke Adachi
2. 発表標題 Irony and the Melodramatic Imagination in the Poetics of Gogol
3. 学会等名 The 4th Russian-Japanese Scientific Forum, Moscow State University, Moscow（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Daisuke Adachi
2. 発表標題 Gogol's Melodramatic Imagination (Panel VI - 8. Gogol in the Context of World Literature)
3. 学会等名 The 10th East Asian Conference on Slavic Eurasian Studies, University of Tokyo, Tokyo（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名	(安達 大輔)
2. 発表標題	(ゴーゴリとメロドラマ)
3. 学会等名	XIV ゴリ研究会) 於国立ゴーゴリ博物館: ゴーゴリ村(ウクライナ)(招待講演)(国際学会) (第14回ゴー
4. 発表年	2019年

1. 発表者名	Daisuke Adachi
2. 発表標題	Tchaikovsky's The Queen of Spades and Attention as a Cultural Problem (ロシア語報告)
3. 学会等名	HU-MSU Round Table "Russian-Japanese Cultural Dialogue," Keio Plaza Hotel Sapporo, Sapporo (招待講演)(国際学会)
4. 発表年	2018年

1. 発表者名	安達 大輔
2. 発表標題	ゴーゴリにおける反省について
3. 学会等名	日本ロシア文学会北海道支部会 於北海道大学: 札幌
4. 発表年	2018年

1. 発表者名	Daisuke Adachi
2. 発表標題	Russia's Negative Landscape: Imperial Discourse, Photographic Image and Gogol's Writing
3. 学会等名	(移民学とスラヴ研究) 於上海師範大学: 上海(招待講演)(国際学会)
4. 発表年	2018年

1. 発表者名 安達 大輔
2. 発表標題 身投げの理由：オストロフスキイ『雷雨』をセンチメンタリズム文学と比較する
3. 学会等名 日本18世紀ロシア研究会 於明治大学（駿河台キャンパス）：東京
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Daisuke Adachi
2. 発表標題 Russia 's Negative Landscape: Imperial Discourse, Photographic Image and Gogol 's Writing
3. 学会等名 9th Symposium on European Languages in East Asia "Shifting Spheres of Influence- Perspectives on the Transformation of Empire(s) in East and West," National Taiwan University, Taipei (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 (安達 大輔)
2. 発表標題 (ロシア標準語史に関するヴィノグラードフの業績におけるゴーゴリの言語と詩学)
3. 学会等名 Rethinking the Role of Normative Grammar in Society and Beyond: Interdisciplinary Approaches (Hokkaido University - Lomonosov Moscow State University Exchange Days), MSU, Moscow (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Daisuke Adachi
2. 発表標題 Emotion, Body and Subjectivity: Discourse on the Suicide 's Body in Ostrovsky 's The Storm
3. 学会等名 The Problem of Emotion in Nineteenth-Century Literature: Dostoevsky, Other Writers and Beyond, Hokkaido University, Sapporo (国際学会)
4. 発表年 2019年





1. 発表者名 Daisuke Adachi
2. 発表標題 Back to the Future?: Rethinking Affect in Gogol 's Writings through Their Film Adaptations
3. 学会等名 ICCEES IX World Congress 2015, Makuhari ( 国際学会 )
4. 発表年 2015年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 安達 大輔 (沼野 充義、望月 哲男、池田 嘉郎編集代表)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 886
3. 書名 ロシア文化事典 ( 「余計者」 ( 366-367頁 ) 、 「ゴーゴリ」 ( 384-385頁 ) )	

1. 著者名 安達 大輔 ( 金沢 美知子編 )	4. 発行年 2016年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 408
3. 書名 18世紀ロシア文学の諸相 ( 分担執筆 「カラムジンの初期評論における翻訳とその外部」 、 123-146頁 )	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>社会貢献活動</p> <p>1. 安達 大輔 「ゴーゴリの手：『鼻』から「手」を考える」2019年度スラブ・ユーラシア研究センター公開講座「再読・再発見：スラブ・ユーラシア地域の古典文学と現代」第3回 ( 2019年5月17日於北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター )</p>
---

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----